

吹矢の紅

野村胡堂

—

錢形平次はお上の御用で甲府へ行つて留守、女房のお静は久し振りに本所の叔母さんを訪ねて、

「しいちゃんのは鬼の留守に洗濯じゃなくて、淋しくなつてたまらないから、私のようなものを思い出して来てくれたんだろう」などと、遠慮のないことを言われながら、半日油を売った帰り途、東両国の盛り場に差しかかったのは、かれこれ申刻ななつ（四時）に近い時分でした。

平次と一緒になる前、一二年この水茶屋で働いていたお静は、両国へ来る
と——往来の人の顔にも両側の店構えにも、いろいろと古い記憶が蘇よみがえります。

今の幸福さに比べて、それは決して甘い思い出ではなかったにしても、その記憶の中に織込まれている平次の若いおもかげや、今は行方も知れなくなった多勢の朋輩ほうばいたちのことなどが、涙ぐましく懐しく思い出されるのです。

「まア」

その中にも、かるわき軽業の玉水一座の絵看板がお静の注意をひきました。花形の太夫は小艶こえんという二十四五の女で、曾かつては水茶屋のお静と張合った両国第一の人氣者。身持の方は評判の良い女ではありませんでしたが、芸と容貌は抜群で、わけてもその綱渡りは名人芸でした。

もう一人小染というのが同じ玉水一座におります。もう二三年会ったことありませんが、お静とは年齢へだたの隔りを越えての仲好しで、芸の修業の辛さを、泣きながら訴えた小娘時代のこと、昨日のことのように思い出されます。もう十九か二十の立派な女太夫になっていることでしょう。これは吹矢の名人で、

数十歩を隔てて木綿糸に吊った青銭の穴に射込むという凄惨な芸の持主でした。

「おや？」

お静は物に脅おびえたように立止まりました。

軽業小屋の中は煮えくり返るような騒ぎで、一パイに入ったお客は、興奮しきった顔をして木戸から外へ追い出されております。

「可哀想じゃないか、あんな結構な太夫を殺して、——過あやまちで墜おちたのかと思つたら、こめかみへ吹矢が突つ立っていたんだってネ」

「過ちで落ちるような太夫じゃないよ、綱の上で昼寝をしたという小艶だ」

そんな群集の話を聴くと、お静はハツと立ち縮すくみました。玉水一座の花形太夫小艶が、綱の上で何にか間違いをしたのでしよう。小艶が渡った高綱、——

舞台の上六七間もあるところへ張り渡して客の頭の上まで乗出したのから落ちては、怪我くらいでは済まなかつたでしょう。その上、こめかみの吹矢という

言葉が妙にお静の神経を焦立いらだてています。

楽屋裏の方へそつと廻ると、ここには表にも劣おとらぬ人立ちで、

「寄るな寄るな見世物じゃねエ」

四ツ目の銅八の子分衆が、威猛高になって弥次馬を叱り飛ばしております。

曾かつては平次と張り合った御用聞——石原の利助が死んで、娘のお品が山の手に引越してからは、子分衆もすっかり四散してしまい、この辺は四ツ目の銅八が乗出して、銭形平次などには、指も差させまいとしているのでした。

お静は人垣の後ろから背伸びをしていると、

「退け退け」

赭あかい大顔の銅八の叱咤につれて、どつと二つに割られた群集の間を何やら女の縄付が送り出された様子です。



「あれが下手人だとさ」

「綺麗な顔をしている癖に、まあ怖い」

「吹矢はお手のものだもの、口惜しさが高じてツイやったんだよ」

勝手な囁きの中を、縄付はお静の方に近づきました。

「あつ、お染ちゃん」

一と目で、お静は声を立ててしまいました。予期したことであつたにしても、舞台化粧のまま、肩衣かたぎぬだけ取つて、派手な振袖の上から、キリキリ縛られたのは、お静には昔友達、小染のお染ちゃんだつたのです。

小染はフト顔を挙げました。鬢下かつらしたのよく似合う、眼の大きい顔が、恐怖と焦燥とに顫えながら、群集の中から何やら捜している様子でしたが、やがてお静の眼と眼が会うと、

「あ、お静さん、——助けて、——お願い、——私じゃない、——私は何んにも

知らなかったんだから」

救いを求むる言葉が、ささべに笹紅を含んだ小染の唇から迸ほとばしりました。

「えッ、黙らないか」

縄尻がピシリと鳴りました。

その後から跟いて来た銅八の赭い顔は、疾風迅雷的に下手人を挙げた自分の手柄に陶酔しながら群集の中へ捜るように瞳を射かけます。縄付の小染が救いを求めたのは、どこの誰だろうと言った顔です。

お静は幸い人混に隠れて、銅八の視線を避けました。が、平次が甲府から帰るのは何時のことやら判らず、お静の手一つでは、小染を救う工夫も付きませ
ん。

哀れ深い縄付きの後ろ姿を見送って、お静の重い足は、両国橋を渡って、自分の家——平次の留守中近所の耳の遠い婆さんを頼んで留守番をさしている家

——へ急ぎました。その途中、向柳原の荒物屋の二階を借りて不精な男世帯を
持っているガラツ八の八五郎のことを思い出しました。

二

「八五郎さん、お願いがあるのですが——」

店先へガラツ八を呼出して、お静はこう切り出しました。

「留守見舞にも行かずに、姐御に歩かしちゃ濟んませんね」

ガラツ八の八五郎は、昼寝起きらしい長なんがい顔を撫でて、それでも世間並
のことを言うのです。擬まがい唐とう棧ざんの袖口が綻ほころびて、山の入った帯、少し延びた不
精髻——叔母さんが見たら、さぞ悲しがるだろうと思う風体でした。

「姐御だけは止して下さいよ。お静とか何とか、言いようがあるのに——」

幾つになつても、初々しさを失わないお静は、姐御——と言われると、ゾツと身を顫たぢわせる質たちの女だったのです。

「ところで用事というのはどんなことですか」

八五郎は取散らした自分の二階へ案内するよりはと思つた様子で、狭い店先にしゃがにしゃがみました。

「他でもないけれど——」

お静は両国でツイ今見て来たことを一と通り話して、

「——お染ちゃん可哀想だから何んとかしてやって下さい。あの人は正直で、素直でそりゃ心掛の良い人だから、人なんか殺せる筈はないし、それに、多勢の中にいる私を見付けて、一生懸命でそう言うんだから」

一生懸命に説き進むお静を、ガラツ八は少し持て余し気味に押えました。

「よくわかりましたよ。何んとかしてやりたいが、——石原の親分が達者なう

ちならともかくも、近頃では四ツ目の銅八が羽を伸ばして、錢形の親分を眼の敵にしているから、親分の留守にうっかり本所あたりへ乗込むと、どんなことになるか解らない——」

ガラツ八は日頃にもない尻込みをするのです。

「そんなことを言わずに、何んとかしてやって下さいよ、八五郎さん。お染ちゃん可哀想で、私は見ていられない——」

「弱ったなア」

「いつも八五郎さんが、そう言って引込み思案のうちの人を誘い出すじやありませんか。——どんな証拠があるか知らないけれど、あんな氣の良いお染ちゃん、人なんか殺すもんですか。黙って見ていちゃ御用聞冥利が尽きますよ」

「驚いたなア、どうも」

八五郎は妙なところで敵を討たれて、頬を撫でたり、額を叩いたり、小鬢を

搔いたりするばかりです。

でも、お静が帰ると直ぐ、八五郎並の武者振りを整えて、フラリと両国へ出かけました。大きな弥蔵を二つ拵えて、肩で調子を取って玉水一座の裏からヌツと入ると、これが四ツ目の銅八の手柄をデングリ返させる気でやって来たとは、誰の目にも見えません。

「おや、八五郎兄哥」

そこに関を据えたのは、銅八の右の腕と言われた、小梅の定吉でした。三十そこそこ、小意気な男で、八五郎のノツソリとしたのとは、巧まざる面白い対照です。

「小艶こえんが殺されたそうじゃないか。満更知らない仲じゃないから、悔みくやを言う心算つもりで来たが、まだいるかい」

ガラツ八は顎をしゃくりました。

「皆んないるよ。いないのは下手人の小染だけさ」

「小染が下手人？　へエ、——あの好い新造がネ」

「新造だって年増だって、人を殺さないとは限るまい。まア入って線香の一つも上げて行ってくれ。岡惚れが一人でも来てくれると、死んだ小艶も喜ぶだろう」

「じゃ、ざつと拝んで行こうか」

ガラツ八はさり気ない調子で入りました。

客は皆んな追い出して、木戸を締めきり、いずれ二日や三日休んで、小屋を浄きよめなければならぬでしょうが、人気者の綺麗きれいなのを一時に二人失って、太夫元は言うに及ばず、一座の者もすっかり萎しおれ返っております。

綱から落ちて死んだ小艶の死骸は、舞台裏の小さい仕度部屋に入れて、ささやかな吊いの営みは用意しておりますが、一座の者はすっかり、顛倒してしまっ

て、殆んど寄り付く者もありません。

仕度部屋は案外明るく、外は暮れかけておりますが、灯あかりなしに、何うやら見当だけは付きます。

線香にも及ばず、片手拝みに小道具の屏風を押し退けると、薄い蒲団の上に、無残、自分の楽屋着を掛けたまま美しい小艶は横たわっております。

「六間以上の高さから、真つ逆様に舞台に落ちたんだ。ひとたまりもないよ」
定吉は後ろから覗きました。

「猿が木から落ちたようなものだ」

「猿は木から落ちるかも知れないが、名人と言われた小艶が綱から落ちる筈はないよ。こめかみへ吹矢でも射込まれなきや——」

定吉の指さしたのを見ると、小艶の右のこめかみに深々と吹矢の突っ立った跡があつて、襟まで流れた血が、玉虫色たまむしに固まりかけております。

「吹矢は？」

「繩付といっしょに番所へ持って行ったよ。油で痛めた古竹の芯しんへ、美濃紙の羽根を巻いた凄いやつさ」

「どこから吹き付けたんだ」

「舞台裏さ、来て見るがいい」

ガラツ八は定吉とつれ立って、すぐ傍の舞台へ行ってみました。仮り小屋の到って粗末なものですが、骨組だけは嚴重で、舞台の上から客席の天井を通して、向う棧敷さしきまで張った綱の高さは、全く六間以上もあるでしょう。

「客の頭の上に落ちなかったのが、まだしも仕合せさ」

定吉は頭の上を走る綱を見上げました。

小艶が落ちたあたり、舞台の上には血がこぼれて、いろいろの大道具、小道具が取散らしてあります。

天井からは幾つかの鞆ぶらんこがブラ下り、衝立、小机、竹馬、大小の箱、鞭むち、それに何に使うか見当も付かないものが舞台裏一パイに並べてあり、その蔭——ちようど小艶の死体の入れてある小部屋の前に問題の吹矢筒が投げ出されてあつたということです。

「この一座には、どんな人間がいるんだ」

ガラッ八は心安立てに、定吉に訊くのでした。

「殺された小艶こえんと、口上言いの一寸法師の玉六と、道化の玉吉は舞台にいたそ
うだ。竹乗りの玉之助は、太夫元の権次郎と少し離れた裏口で立話をしている
と、ちようど騒ぎが起つたと言うよ、——権次郎は毎日二度昼少し過ぎと、夜

の興行が終^はねる頃様子を見に来るんだ」

「それから」

「下座は一人休んで、半助とお百という夫婦が忙がしく働いている。綱渡りが始まると、女房の三味線に亭主の鉦^{かね}で傍見もできない」

ガラッ八を甘く見て、定吉は何んの隠すところもなく話してくれるのです。

「それつきりか」

「あとは木戸番だが、こいつは勘定に入れるまでもあるまいよ。客の中を泳いで、楽屋まで人殺しに来られるわけではないから」

「成程な」

「ところで、たった一人でいたのは、あの小部屋で休んでいたという小染だ。

そのくせ騒ぎのあった時、道具裏の暗いところで、ウロウロしていたんだから変じゃないか、本人は小部屋から出たところを誰かに頭から蒲団を冠せられて、

しばらくは声も立てられなかったというが、その蒲団が押入の中にチャンと納まっているからおかしかりう」

「フーム」

「それから吹矢だ。——六間も上の綱を渡っている人間に道具裏から吹矢を飛ばして、こめかみへ一寸も射込むのは、小染の外にない、どうだ」

そう言われるとまさにな言もありません。

「一応係り合いの者に会って見たいが——」

ガラツ八は諦め兼ねました。

「銭形の親分が後から来るのかい」

「いや、親分は甲府へ行つて、いつ帰るか解らない。親分がいちゃ、こんな出過ぎたことはさせないから、ちよいと後学のため四ツ目の親分の調べようを見ておくのさ」

ガラツ八は一世一代の知恵を絞るしほ気——とはさすがに言いません。

「いいとも、銭形の親分が夫婦連れで来たって、他に下手人は拳がるわけはない。さア、こう来るがいい」

定吉に伴れられて、形ばかりの大部屋へ行くと、そこは百鬼夜行の有様でした。おしろい白粉を塗ったの塗らないの、派手な舞台衣裳を着たの、小汚い不断着のまもの、いろいろの男女が六七人、吹溜りのように部屋の隅の、火のない火鉢を囲んで、みやくらく脈絡も系統もないことを、ボソボソ話しているのです。

「お前は？」

ガラツ八はその中でも一番たくま遅しそうな三十前後の男を捉えました。

「玉之助でございます」

竹乗りの名人で、小艶、小染と共にこの小屋にはなくて叶わぬ人気者です。

柄は大きくありませんがキリリと締った鉄のような四肢と、よく発達した胸を

持つ男で、成程これなら、一本の竹の上で千変万化の軽業を見せてくれるでしょう。

「小艶は誰かに怨まれていたんだらう」

ガラツ八は先まずこんな定石を布きました。

「皆んな怨んでいましたよ。何しろ、芸がうまくて、女がよくて、ここで一番古い人ですから、齒の立つ人間なんかありやしません」

玉之助は酔よっぱさうな顔をしました。張った顎、切れの長い眼、何んとなく精悍せいかんな感じのする男です。

小艶の増長と我儘は、ガラツ八もさんざん聴かされておりますが、女が美しくて芸がよかっただけに、太夫元も見て見ぬ振りをし、一座にも、正面は楯たてをつく者はなかったのでしょう。

「小艶と仲のよかったのは？」

「女同士で、やはり小染ちゃんが馬が合うようでしたよ。尤も人気者同士で、芸も張り合っていたから腹の中じゃどう思っていたか解りませんが」

何にかしら、棘とげのあるものの言いようです。

「この一座で、小染の外に吹矢のいけるのはないのか」

「皆んな真似事で少しはやりますが、六間も上にいる人間のこめかみを射る名人はありません」

そう言われると、小染以外の者を疑うだけが馬鹿のようです。

「お前はその時どこにいたんだ」

「裏口で親方（権次郎）と給金の掛合い最中でした。少し不義理な借りを拵こしらえてしまつて、前借でもしなきや首を取られそうぞ。へいへい、尤も、道具裏なんかにウロウロしていると、あつしが一番先に縛られたかもわかりません。小艶に小当りに当つて、小っぴどくはね飛ばされた口ですから——あの女は玉の

輿に乗る気でしたよ」

竹乗りの玉之助はそんなことまでツケツケ言うのです。

道化役の玉吉は、二十七八の若い男。あるへいとう有平糖のような袴かみしもを着て、鼻の下に白

粉を塗ったまま、手拭を首つ玉に巻いた姿で、ガラツ八の前へヒョイとお辞儀をしました。恰好も仕業も舞台そのままの可笑味で、ガラツ八は危うく吹き出しそうになります。

「お前は舞台にいたんだね」

と八五郎、

「へエ、玉六さんに口上を言わせて、衝立に絡からんで所作をしておりました。――

――するといきなり頭の上から小艶さんが落ちて来たじゃありませんか。いや驚いたの驚かないの」

「それから」

「飛び付いて介抱しましたが、こめかみを吹矢で射られた上、六間も高い所から落ちたんですから助かりっこはありません」

こんなことで一向要領を得ません。

口上言いの玉六は、一寸法師というほどではありませんが、ひどく小柄な男で福助鬘かつらを冠かぶりって、これも袴かみしもを着けておりました。

「私はこんな生れ損いですから、小艶さんには随分からかわれました。でも、小艶さんが死んでしまっちゃ、この興行も立ち行かなくなるでしょうから、今じゃ途方に暮れていますよ」

尤も至極なことを言います。これは柄は小さくとも、四十の坂を越しているかもわかりません。口上言いの外物真似ほかが上手で、役者の声色こわいろや、人の口真似などは堂に入った芸でした。

「お前も舞台にいたんだね」

「へエー、道化の玉吉さんが衝立へ這い上がる真似なんかして、お客様を笑わせたり、衝立の蔭へ首を突っ込んで唄を歌っている間、私は傍でときどき口上を言っております。そこへドシーンと来たんです」

「小艶も小染も独り者だね」

「へエー」

「男はなかったのか」

「小艶さんは見識けんしきが高く、小屋の者なんか相手にもしませんし、小染さんは堅い一方の人でしたから」

こんなことではなんにもなりません。

囃子方はやしかたの半助お百夫婦にもいろいろ訊ねて見ましたが、これは貧乏疲れのした中年者で、何んにも知らず、

「綱渡りが始まると囃子の方は二人で手一杯ですよ」

そう言うだけのことで。

最後にガラツ八は、太夫元の権次郎に当って見ましたが、これは竹乗りの玉之助の不在証明を裏書するだけのことで、

「困ってしまいましたよ、小艶は一座中から憎まれていましたが、それだけ芸達者でした。小艶に死なれた上、近頃人気の出て来た小染が縛られりや、当分小屋は休むより外はありません。何んとか親分のお力で、小染だけでも助けて下さい。恩に被^ますが」

そんなことを言うのです。少しくらいは金を出しても、小染の縄を解かせろという謎でしょう。ガラツ八は素知らぬ顔をして、木戸番や、弥次馬や、近所の衆の噂をかき集めました。

それを綜合^{そうごう}すると、小艶の増長は全く悪魔的で、一寸法師の玉六などは、悪戯^ぶっ子のように撲^ぶたれることさえあり、——玉之助は一度「女房になってくれ」

と言つたばかりに、人様の前で、滅茶滅茶に恥をかかされ、道化の玉吉は舞台で自分の引立てようが悪いから、追い出すようと太夫元へねじ込んでいるという噂さえもありました。

それに比べると、小染には悪い評判はなく、人気は近頃メキメキと小艶を凌いでおりますが、ただ正直一途で、道化の玉吉に恥をかかせたり、竹乗りの玉之助の不正を見て見ぬ振りができなかつたり、変なところで怨みを買っていたことも事実です。

騒ぎのあつた時、——小艶は綱の上へ真つすぐに立っていたこと、道化の玉吉は衝立の蔭に首を突っ込んで、良い声で唄を歌っていたこと、——玉六はそれに調子を合せながら、尤もらしい調子で口上を言っていたこと、百人が百人の口はことごとく合います。

すると小艶へ吹矢を飛ばせるのは、やはり小染の外にはないことになります。

ガラツ八はがっかりしてしまいました。

四

「誰だい、その野郎は？」

八五郎が小屋の者を調べている最中、ノソリと入って来たのは、四ツ目の銅八でした。四方は薄暗くなつたと言つても、八五郎の顔と調子が判らない程ではなかつたでしょうが、自分の仕事に足を踏込まれると、こう言わずにはいられない戦闘意識の旺盛おうせいな銅八であつたのです。

本所の四ツ目に住んで、四ツ目の銅八と言われるに不思議はありませんが、自分だけは、他人の二倍物を見えるから、四ツ目の銅八と言われている心算つもりだつたでしょう。銭形平次の、江戸に鳴り響く噂が、癩しゃくで癩しゃくでたまらないと言つた

人柄でした。

「銭形の親分ところの、八五郎兄哥ですよ」

小梅の定吉はとりなし顔で言いました。

「何？ ガラツ八兄哥か、そいつは気の毒だ。三輪の万七兄哥とは違うから、俺の仕事のあとをせせつたところで手柄になるめえ」

「そんなわけじゃありませんよ、四ツ目の親分」

八五郎はあわてて弁解しました。

「当りめえだ、そんなわけだたまるものか。お互にお上から十手捕縄を預かる身体だ。鼻の明かし合いや、手柄の奪い合いをされてたまるものか」

「――」

銅八の調子は次第に猛烈になるばかりです。

「そんなしみつ垂たれな三下野郎を相手じゃ役不足だ。手柄争つもりいをする心算なら、

平次に出て来いって言え。憚りながら四ツ目の銅八だ、見込んだ下手人に間違

いがあるもんか。万一小染が下手人でなかつたら、あんまり綺麗な細工じゃね

エが、たった一つしかねエこの雁首がんくびをやると思うがいい。糞面白くもねエ」

「銭形の親分は甲府へ行って留守ですよ、だからあつしが——」

「だからあつしてエ面かい。出直しやがれ、間抜けめ」

「——」

ガラッ八は指を銜くわえてだまつて引下がる外はありません。四ツ目の銅八と自分とでは、あまりにも貫禄が違います。

その晩、平次の留守宅へ行って、お静に一部始終を話したガラッ八は、あまりの口惜しさに、ポロポロと涙をこぼしておりました。

「いくら四ツ目の親分だって、人を檻ほろ樓ろうつ糞に言やがる。あんまり癩かさにさわるから、何とかしようと思ったが、小梅の定吉が目顔で留めるから、胸をさすつ

て引揚げて来ましたよ」

「まア、氣の毒な」

人の好いガラツ八がボロボロと泣くのを見ると、お静はどうしていいか解らなかつたのです。

「この仕返しには小染が下手人でないと解けばいいんだが——」

「で、どうなつたの八五郎さん」

「困つたことに、誰が見たって、小染の外に下手人はありませんよ。六間以上ある綱の上——大揺れに揺れる小艶のこめかみに、下から吹矢を射るような名人は、江戸中に二人とあるわけはない——」

ガラツ八は高々と腕を拱こまぬくのです。

それから三日、必死の探索も何んの役にも立たず、小染は口書き拇印ほいんを取られて、いよいよ送られるばかりになりました。

平次はまだ帰って来ません。

「面白いことを聴き込みましたよ」

ガラッ八が踊るように飛び込んで来たのは四日目でした。

「どうしたの、八五郎さん」

「こんなことを聴いたんです。小染という女は吹矢の名人だが、矢を吹くとき一つ変な癖があった。それは、矢の羽根——美濃紙みのがみを巻いて、末広の袋なりに尖とがった方を、口で一寸喰い千切る癖があったでしょう」

「え、え、お染ちゃんにはそんな癖がありましたよ」

「そうすると袋羽が平になって、よく飛ぶらしいと言うんで、——ところが、小染は濃い口紅を付けていたから、喰い千切った時、美濃紙の羽根へチョッピリ紅が附く」

「え、それがお染ちゃんの愛嬌だったんです」

お静もよくそんなことを知っていました。

「ところが、小艶のこめかみに突つ立った吹矢の羽根は、無疵むきずの美濃紙で、喰い切った跡もなく紅も附いちやいません、——役所で見せて貰ったんだから、こいつは間違いありません」

「まア」

お静の顔も活々いきいきと輝きました。

「あの吹矢は小染が飛ばしたんじゃないと言つて見たが、——駄目でしたよ。

小染だつて人一人殺す時だから、あわててもいるだろう。羽根を喰い切らなくたって、そんな事は証拠になるものか——と銅八親分は以ての外の剣幕だ」

「まア」

お静は慰めようもありません。

五

銭形平次が旅から帰って来たのは、それから、三日経ってからでした。

お静とガラツ八が、交る交る報告する軽業小屋の不思議な殺しの顛末、平次は黙って聴いておりましたが、

「馬鹿野郎、何というへまばかりするんだ」

少し苦々しく舌打をします。

「親分、何うしたものでしょう。このまま引込んで、私は構わないが、親分の顔にもかかわります」

八五郎は膝つ小僧を揃えて、ピョイとお辞儀をしました。この上もなくしおらしい恰好です。

「ね、なんとかして上げて下さい。私が八五郎さんに頼んだから始まったこと

ですから」

お静も少し泣き出しそうでした。

「八の仕出かしたことを、俺が始末してやっちゃ、銅八兄哥に済まねえ。こいつは矢張り八がもうひと働きした方がよかろう」

平次はそんなことを考えていたのでした。

「親分、あつしでできることなら、今まで胸をさすって待っちゃいませぬ。三日も前に本当の下手人を挙げて、銅八の汚いガン首を貫いに行つたんだが」

「馬鹿だなア」

「どうにもあつしじゃ見当が付きませぬ。小染が下手人でないということとは解っているんだが」

「どうして小染が下手人でないと解つたんだ」

「小染が下手人なら、吹矢なんかは使いはしません。それに、羽根に紅が——」

「よしよし、そこまで判つていれば、あとはほんのちよいとだったんだ。これから直ぐ小屋へ行って小艶こえんのこめかみに突つ立つた吹矢は、真つすぐだったか、下向きになつていたか、それをなるべく多勢の人から聴いて来てくれ」

「へエー」

「それから、あの舞台には後見人がいるかいないか、——黒衣くろごを着る人間が
いるかいないかそれを聴くんだ」

「へエー」

「もう一つ、舞台か舞台裏から天井の綱へ登る梯子はしごが幾つあるか、それを見極めて来るんだ。見物から見られずに、天井へ登る道があるだろうと思うが」

「それは判ります。舞台の上手に縄梯子があつて、太夫はそれを手繰たぐつて六間も上の綱へ登るんです」

「客から見えるのか」

「小艶が派手な様子をして登るところも一つの見物で——」

「フォーム、そいつは困ったな。まア、もういちど念入りに調べて見るんだな。道具裏に何か手掛りか足掛りがあるだろう」

「それじゃ親分」

「念入りに調べるんだぜ。俺はその間にひと風呂入って、ひと寝入りしている」
平次の知恵を借りると、ガラツ八は魂を吹き込まれたように飛出しました。

「大丈夫でしょうか」

お静は旅疲れを慰める気の手料理をしながら、心配そうな顔をお勝手から出しました。

「俺にはからくりが解るような気がする。八五郎が二三度歩くうちに何んとかなるだろうよ」

平次は手拭を下げて、ブラリと風呂へ出かけました。

その晩意気込んで帰ったガラツ八は、

「まア一杯付き合いなから話すがいい」

平次の差した盃を下に置いたまま、弁じます。

「親分、吹矢は小艶のこめかみへ真っすぐに立っていたそうですよ。六間も上の綱の上にいる人間のこめかみへ、下から吹きつけた吹矢が、真っすぐに立つ筈はないでしょう」

「その通りさ、俺はそれを知りたかつたんだよ。それから黒衣くろごは」

「黒衣は衣裳いしやう戸棚にあります、黒衣を着る後見人は二年もないそうです。芸人が皆んな馴れて、黒衣が要らなくなつたんだそうで、これは権次郎の自慢でしたよ」

「その黒衣を見たのか」

「いいえ」

「それだから無駄な骨を折るんだ。明日でいいから、もういちど行って見て来るがいい。二年も着たことのない黒衣なら、さぞ埃ほこりがひどかろう、畳み目をよく見るんだ。——それから梯子は？」

「やはり舞台の隅に、見物から見えるのが一つあるだけですよ」

「そんな筈はない」

「尤も道具裏にも綱は幾本も下がっていますよ」

「その縄を手繰って上へ登れる筈だ。これも明日よく見て来るがいい。一座の者は皆んな身体がきくんだぜ。縄が一本ありゃ、五間や六間は苦もなく登る」

「なるほどね」

「まア、そんなことでよかろう、明日もういちど行って、衣裳戸棚を捜さがすがいい。黒衣があったら念入りに見るんだぜ。それから道化の衣裳——有平糖あるへいとうのよかみしもうな袴かみしもがもう一と揃いある筈だ。それも見て来るがいい」

「へエー」

ガラツ八にも、何にか次第に事件の真相が判るような気がしたのです。

六

翌る日、ガラツ八の報告は、平次の考えたことと、ピタリピタリと合って行きました。

第一番に、二年も使わないという黒衣が、埃を冠っておりますが、畳み目も崩れて衣裳棚へ抛り込んであり、道具裏には天井から下がった太縄が三筋も四筋もある上、壁や羽目に足掛りがあつて、軽業師ならずとも、縄を手繰つて容易に登れそうだと言うのです。

道化の赤縞あかしまの袴かみしもは、平次が考えたように、同じものが二た組ありました。し

かもその一と組は衣裳戸棚の底へ、団子にしてねじ込んで、容易に見付からな
いようにしてあつたのでした。

「それでいい、——染ちゃんは助かったよ、お静」

平次は勝手へ声を掛けました。

「まア」

お静は前掛で濡れた手を拭き拭き、ベタリと敷居際に坐り込んでしまします。
「八、今度はむずかしいぞ。玉之助や玉吉では手に了えまい。お前の工夫で、
一寸法師の玉六をおびき出すんだ。あの男は思いの外確り者らしいから、容易
に口を割るまいが、うんと脅かしたら、何んとか眼鼻がつくだらう。——俺は
小染に会って、いろいろ聴きたいことがある」

平次とガラツ八は手分けをして出かけました。が、約束の夕刻、平次は小染
の口からいろいろのことを訊き出して帰ったのに、ガラツ八は気抜けのしたよ

うに引揚げて来たのです。

「親分、玉六は昨夜からいませんよ。どこかへ逃すらかったんじゃありませんか」

「いや、そんな筈はない。玉六は下手人じゃない、——それにあの身体じゃ高飛びしたって、三日経たないうちに捕まる」

「変ですね」

「こいつは、飛んだことになったかも知れないよ、八」

「へエー」

平次の予感は当りました。その翌る朝、一寸法師の玉六の溺で死き体は、百本杭ぐいから揚ったのです。

「やったな」

「親分」

「こうなれば抛ほうって置けない。来い、八」

「どこ行くんで」

「小艶と玉六を殺した下手人を挙げるんだ。銅八兄哥への気兼ねなんかしちや
いられない」

二人は両国へ飛びました。

「御用ッ」

飛び込んで平次が組み伏せたのは、竹乗りの玉之助でした。

「何をッ」

非凡の怪力でハネ返して、逃げ出そうとするのを、

「野郎ッ」

と八五郎が羽搔締はがいしめに喰い止めたのです。

「八、任せたぞ」

そう言って平次は、奥へ飛込んで、逃げ道を捜している道化の玉吉を捉とらえた

のです。

「神妙にせい」

「親分、小艶こえんを殺したのは、玉之助ですか、それとも玉吉ですか」

二人の悪者を送った帰り、ガラッ八は例によつて絵解きをせがみます。

「道化の玉吉だよ」

「衝立の蔭へ首を突っ込んで唄を歌つたのは？」

「玉吉と玉六さ」

「へエ——」

ガラッ八にはまだ解りません。

「三人で相談してやったのさ。竹乗りの玉之助は小染に蒲団を冠せてグルグル帯で縛つたまま、道具裏に突っ転がし、時分を測はかつて裏口で権次郎と話をしていたんだろう。——道化の玉吉は衝立の後ろへ首だけ入れると見せて、大急ぎ

で黒衣を着て、道具裏の縄を伝わって天井に登り、近いところから吹矢で小艶を射たのさ」

「歌ったのは？」

「一寸法師の玉六だよ、あの一寸法師は物真似こわいろ声色の名人だ。衝立の蔭にもう一つの道化かみしもの袴をチラ付かせて、玉吉の声色で歌っていたんだ。見物の衆は天井の綱渡りに気を取られているからそんなことには気が付かないのさ。小艶が綱から落ちた頃、小染はようやく蒲団から抜け出して舞台へ飛出したんだろう。玉之助は後から行って蒲団を丁寧に畳んで置いたんだろう」

「へエ——すると、玉六は？」

「お前がおびき出して口を割りそうだと見たから、多分力の強い玉之助が誘い出して大川へ沈めたんだろう。お白洲しらすで皆んなわかることさ。ところで、下手人は小染でないからなんて、銅八親分のところへ首なんか貰いに行っちゃなら

ねエよ」

「へエ、あつしは貰いに行く心算つもりでしたが」

「そんな心掛だから何時まで経っても腕が上がらないんだ。銅八親分はもう散々恥を搔かいている。この上嫌がらせをしちゃならない。人の心持を察してやるようになれば、人の心を見抜くことも覚えるのさ」

「へエ——」

ガラツ八は正に一言もありません。

「それより、小染が帰ったら、お静が逢いたがっているから、お前が行ってつれて来てくれ。あの娘は心掛けがいいから、堅か気にして嫁よめにやりたいって、お静は一生懸命だよ。どうだ八」

平次はガラツ八を顧かえりみて面白そうに笑うのです。この男、いったい何時になったら嫁を貰う気になるでしょう。

(編注)

作品中には、身体の障害や人権にかかわる、差別的な語句や表現が見られますが、本書が成立した当時の時代背景等が現代とは異なる古典的な文学作品でもあり、著者が故人でもありますので、底本のままとしました。ご理解、ご諒承のほどをお願い申し上げます。

挿絵―萩 柚月

初出―「オール讀物」昭和十六年二月号 文藝春秋社

底本―「錢形平次捕物全集」第六卷 河出書房 昭和三十一年七月三十日初版

編集・発行 銭形倶楽部

吹矢の紅



錢形俱樂部

<http://www.zenigata.club/>